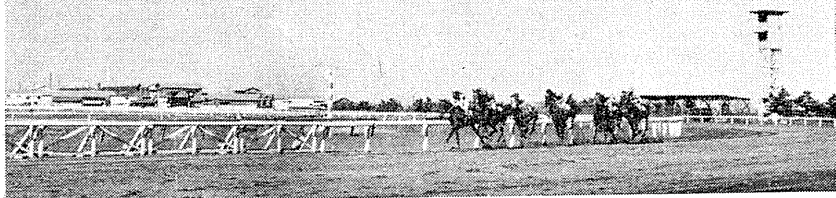


# 区営競馬とともに十年

— 江 馬 嵩 —



区営競馬の生れる前のこと・始めの頃の競馬・区営競馬十年成績寸見・競馬ファンの数などについて・競馬開催利益金の簡単な見積り法・馬券についての雑感・競馬を構成するもの・レースと馬のこと・競馬場の夕暮と朝……。

区営競馬を始めたのが昭和二十五年なので、今年はその十年目に入ったことになるので、ここらで「区政春秋」に競馬のこと何か書いてみないかという話で、これは易しいことにも思えるが、むづかしいことでもあって、迷ったり書くことを忘れていたりするうちに、編集の天野君から厳しい催促を受けてしまった。

そこで考えた結果、仲のいい古い役所の友達から、「君、十年も競馬に関係してきたんだね。久しぶりに逢ったんだが、僕はその方門外漢なんだが、いろいろ話してくれよ」と話しかけられ、それがきっかけでどこからともなく区営競馬についておしゃべりをしてしまったというようなものを、書くのがいいんじゃないかと気がついて、書く道が開けた思いである。

## 区営競馬の生れる前のこと

昭和二十四年七月頃、区長会、議長会で区営競馬をやることに意見が纏まり、十月頃にはその実現の見通しがついたので、当時前の千代田区役所の三階にあった特別区協議会の事務局で資料を蒐集して全区長名を以って内閣総理大臣宛の申請書を出すことになった。その頃、協議会に入らばかりの私は都の事務の分析をやらされていたのだが、それも大体終ったところへ、この資料の作成を命ぜられたので、二十三区に照会して戦争前後昭和一九一三年度五年間における三十五区の決算書を集めたり、三十五区の戦災状況をいろんな角度から調べたりして、漸く一五八頁に及ぶ大部のものをまとめあげ、二十三区を順々に廻って全区長の印をもらい、都と自治庁に申請書を届けたのが、翌二十五年に入ってからだった。私は二十三区役所を全部廻るのは始めてで、どういう道順で行けば一番早く廻ることができ、又電車賃が安くいくかためず気で地図相手に下調べして廻ったのを覚えている。いくらかかったか、又そのコースも残念ながら忘れたが、たしか三日間かかった

覚えがある。自治庁へは促進のため随分足を運んだものだった。それも漸く二十五年八月三十日に至って二十三区漏れなく地方競馬を行うことができることに指定された。その地方財政委員会告示を早く入手するために官報を求めに外へ出たのを覚えている。浅井事務局長は「この指定は財政自主権確立運動の一かんとして得たものである」といって非常に喜んだ。

そこで、その年にできた大井競馬場で開催することになるのであるが、当時は年三回位の予定であったので二十三区各々がやるわけにもいかないし、一部事務組合を設立して共同処理するのが適当ということで、現在の「特別区競馬組合」の設立の準備をし、二十五年十月七日に設立の許可指令を受領したのだった。第一回議会はその月の二十日に召集され、管理者等の役員選出から、予算条例等が決められ、第一回区営競馬の発足のお膳立てができた。

### 始めの頃の競馬

二十五年一月二四日が、今日の区営競馬の第一日で、誕生日に当る。

私は組合設立と同時に事業課長を命ぜられたのだが、全然競馬を見たことも、勿論馬券というものも買ったこともない。困ったことになったと思った。競馬法を勉強したり、条例を読んだ位ではわかるものでない。全部その道の先輩に教えてもらうよりない。都の当時の鈴木競馬事務所長、遠藤課長は、だから私の先生である。競馬というものを始めて見だし、馬券も始めて買ってみた。どの人がどういう関係者なのか、広い場内の施設なども一べんに頭に入るものでない。広い旧家へ嫁に行ったようなものである。私自身はそうであっても、競馬の競走業務はすべて都に委託してあるし、都の競馬事務所には鈴木所長以下八王子競馬以来の充分経験を積んだ人がいて責任もって競馬をやっているのだから、本当は心配することは無いのだが、自分自身が知らないうちのことを充分知っているのだから第一日を迎えた気持は不安心だった。事務の方も都の喜柳君に（現在の知事室秘書）すべて教わった。ただ自分に頼れたのはこの仕事は公営競馬であり、役所の仕事であることなので、この点では変りなく普通の庶務・經理の事務なので、内容がもの珍しいことではあるが、

のせる線は心得ていたことである。

始めの競馬が（現在までに一四二回も競馬をやってきたが）一番私には印象に残る。その第一回六日間の総売上が、八、二三六万円であった。最近の競馬の売れる日の一日分位にしか当たらないのだが、当時は関係者皆この数字を喜んだ。議会で収入見積八、〇〇〇万円は、既往の実績から見ても見積過大と指摘されたのを八、〇〇〇万円議決してもらったのだ。つまり赤字にならないで少しでも残る計算は八、〇〇〇万円だったのである。経験豊かな都の鈴木開催委員長がそのうち一億台にはなりませんよという激励が味方で八、〇〇〇万円を計上したのであった。とも角八、〇〇〇万円を少しでも超えたことは幸先よかった。時の管理者、村瀬千代田区長に報告したときは、赤字を心配していた村瀬区長も随分と喜んでおられた。こうして、すべり出しはまず上等だった。

第二回はその翌月十二月に行われたが、これも八、九五三万円売れて、予算を超えた。この時の思い出として未だにはっきり覚えているのはその初日だったかと思うが、朝から凄く強風と雨で、心配して、朝早くスタンド

（当時は木造へ一人で上ってみたら、そこにずぶぬれに立って心配そうに見ている人がいた。競馬議会の星野総務委員長だった。私は強風の中たった一人立って馬場の砂が流れるのを心配してみている星野さんの姿に打たれ励まされるのを覚えた。そういうこともあったが、第二回の競馬は事故もなく成績も予期以上に終った。

第三回は二十六年一月、第四回は二月に開催したが、急に売上ははね上って、何れも二億円を越えた。これは競輪の方が施設整備のため一時中止したのと、競馬法が改正になって払戻六五%が、七五%に引き上げられたことにもよるが、一躍倍加した入場人員には驚いた。即ち六日間三万人台が、八万人台に上ったのだ。この二月開催については大井競馬としては始めてのことで、区がこれをやることになった時、この寒い時季にやるということについてむしろ三月の方を選ぶべきだとかいろいろ議論があったが、結局二月開催におさまったのだがむしろ意外にもこの二月がよかったのである。今思えば不思議な心配をしたものである。その後十年間常に二月が一番よいのである。

## 区営競馬十年成績寸見

この辺で、二五年開始してから十年目の今年の三月末までの成績を総合的にざっと見ることとする。

開催回数 一四二回、日数にするとして六八日  
売上高 三億九千九百六十八万八千五百〇円  
入場人員 八三万六千三百六十八人

この利益金を二十三特別区に分配した金額は、総額三億一、六九四万九、九三五円となっている。一区当たり平均は、一億三、五一九万余円となる。

分配金を年度別に見ると、第一年度即ち二五年度は一区当り三〇〇〇万円、第十年度三四年度は一区当り二、五〇〇万円となっている。十年間の進歩がこの数字の開きからもうかがえる。

この利益金の使途を各区の資料に基づいて総合してみると（三三年度末）

小中学校関係三八%、道路、橋梁、下水等土木関係三五・四%、公民館、庁舎一九・一%、その他七・五%となっている。

区営競馬が、全国公営競馬の中で占めてい

る割合は、昭和三十四年中全国の売上総額二六〇億円に対し、約五六億円売上げているので、二・一五%に当る。全国の主催者団体は九五あるが、売上高からいうと全体の二割余の地位を占めていることになる。この面から見ると、最大の団体であって、公営競馬全体に対する比重からいっても、大きな責任があるわけである。

### 日本の競馬ファンの数等

#### について

昭和三十四年中における中央競馬八カ所で行われた競馬の開催日数は二二一日、公営競馬四三カ所のそれは二、〇六三日、合計二、二七四日開かれたことになる。

その入場者数は、中央競馬約一九〇万人、公営競馬約五二〇万人、合計七二〇万人となっている。区営競馬は、その中一〇五万人を占めている。

その売上高は、中央競馬約二二八億円、公営競馬約二六〇億円、合計四八八億円となる。

以上で、日本の競馬ファン年延七一〇万人馬券の購入高四八八億円となり、約二五%控除されるので、控除金総額は、約一二二億円

ということになる。その一二二億円の内、中央競馬が国庫へ納付する額が二〇億余、公営競馬が地方財政へ振り向ける額が二二億余、両方で約四三億円ということになる（この数字は、全国公営競馬主催者協議会の調査から抜いたものである）。

### 区営競馬開催利益金の

#### 簡単な見積り法

競馬が四億円売れたとする。その場合どの位利益が出るのか。その場合の計算は次の通りである。

勝馬投票券（これは普通「馬券」という）発売高のうちの中券に対し払戻す金額は、実績から見ると、七四・六%位になるので、残り二五・四%と、別収入である入場料収入を加えた金額の中から、開催諸経費を差引いた残りが利益となる。

例えば、四億円馬券が売れた場合

収入 四億円の二五・四%

一億一六〇万円  
入場料 七〇、〇〇〇人

二一〇万円  
計 一億三七〇万円

支出 賞金その他経費 四、三〇〇万円

### 競馬場使用料売上の五%

二、〇〇〇万円  
六、三〇〇万円  
差引残 四、〇七〇万円

計 一割の四、〇七〇万円残ることになる。これが、仮に五%になった場合は、経費増はごく少額であって、大体四億の基準から超過した一億の約二・四%（二五・四%の控除率から競馬場使用料五%を差引いた率）、即ち二、〇四〇万円が更に残ることになる。又、三億の場合利益は約二、〇〇〇万円となる。

それならば、損得なしの発売高はどの辺のラインかという点、約二億一千万円である。とすると六日間競馬を開催して、前半三日間で二億売ったとすると、四日目の中頃には大体元を確保したことになる。

### 馬券についての雑感

(1)

競馬場に十年間に正味八百日以上私はいたことになるが、その間連勝式馬券で、当り券のなかったということがなかった気がする。

十年間投票委員をしていた都の高小野係長も

なかったといっている。

いくら多勢が来ているにしろ、沢山予想の新聞も出ていることであるし、全然人気のない馬もはっきりしているのに、偶然でもそんなことが一度位あっても不思議でないと思うのに、未だぶつからないのである。

この事實は、興味がある。連勝式の目は、十二頭建てのレースの場合は、六つの枠の中に二頭づついて、組合せは三六組になる。五頭建てならば、五つの枠きりなく、一つの枠は一頭だから、 $4 \times 5$ 、二〇通りの数になる。大体二〇通りから、最大三六通りの種類があるわけだが、いつもどの目も売れているということがある。うんと強い馬が二頭いれば、その裏表で全数の半分以上は売れる。ところが残りの半分以上は、他の組に皆割れて売れている。

人の馬券を買う考えはこんなにも違うものである。自分がお金出して、勝手に思うように買うわけだが、勝馬を選ぶのにこんなにも違った結果が出るということは興味がある。つまり意見が、必ず三六通り出るということで、一致しないのである。勿論、勝つ要素がない馬でも、万一もあってその馬を買ってお

くという気持もあるだろうし、その馬必ずしも勝つと考えていなくても、ひいきとか友達馬というので買われているというのもあるわけだ。だから買われている要素は複雑であるにしろ、多ぜいの人が金払ってまで買う結果がそうであるということは興味深い。自分はいこう買うという考えは各人実にも多種多様であることだ。ふだん人と人の関係においてもその考え方がいろいろあることに気づくが馬券に現われる多種多様型はやはりそういうことの現われか。

## (2)

馬券は詳しくなければ当るものかといえは、詳しくないよりは詳しい方が、興味があることは事實だが、当る当らないは全く当てにならない。何十年の経験者は、皆、競馬位むつかしいものはないと言ひ、そしてこんなにもしろいものはないという。野球でも、両方の実力が判っていて、その試合の登板投手の予想が当たっても、たった二つのどっちが勝つかあてるのはむづかしい。相撲でもむづかしい、必らず横綱は勝つわけでない。まして、競馬は三六通りもあってその中一つしか当りはない(同着の例外はあるが)。それをよく読

むことは大変なことである。好きな人は前から出る馬を予想して、検討する。そして当日馬を見て自分の検討をたしかめる。レース前三十分の時間があるが、この時間ではよみ切れない場合もある。つまり、各馬の脚質だの馬の背負う斤量だの、最近の能力だの、持っているタイムだの、騎手の力だの、馬場の状態だの、いろいろ考えてAという逃げのうまい馬がスタートよくとび出し、内側をとって快走し先頭とっていくという絵を頭に描く。そして向う正面では、有力馬の追い込み馬のBを十馬身位無理なく離していけるとする。そのままいければ直線のB馬の追い込みがあってもAを頭にならえと考える。ところがCとEが逃げ馬で枠も二、三枠にいてとび出すのに都合よく、一緒に逃げてせられるおそれがあるとす。またD馬は他の混戦をよそに気楽に自分のペースで走ると案外これにやられるというケースもあるとする。以上は例えばのことであるが、そんな風に出走馬が入り乱れてどう走るかレースの絵が、頭の中で幾通りも去来する。その中、どれをとるかである。実現性のあるレースの絵が詳しい人ほどきちんと幾通りも頭に浮ぶ。将棋のうま

い人と同じであの時はいこうだったということもよく覚えていたので、レース経過が見えてくる。結局、スタートからの偶然がまず自分の描いたレースの絵に合ったか、違ったかからねらいの最初の運が出てくる。そして、次に長い距離におけるレース変化が、よんだ通りになるかどうかである。十二頭の馬が一哩走って、それぞれ僅かの差でゴールにとび込むそのレースの順序をびたっと当てることは、まずむづかしいことだ。しかも馬券を買う人自身が走るのではなく、馬という動物が走るのである。

しかし、強い馬は強い。順当にいけば勝てる筈という馬はいる。しかし、それが必ずしも勝てないというのが、競馬のもつ複雑な独特なおもしろいところであろうか。

ファンは、きちっとレースをよんで、その通り勝てばこんなうれしいことはない。又、負けてもレースの経過をみて、充分納得できればそれでも満足する。同様の代用馬で当っても苦笑して喜ぶ人もある。馬の顔が好きだといってその馬券を買って当たったといって喜んでい人もある。

演劇人の武智鉄二氏はその著「競馬」とい

う本の中で、「競馬のレース自体が、野球にとらぬ演劇的要素を持っていることはいうまでもないが、そのようなレースをとりまく競馬場の雰囲気のみならず、観客が馬券を買うことを通じて、レースの中に参加しており、レースの結果もたらす悲劇や喜劇を、自己の経験とおして味わっていることに由来している。競走馬の所有者はべつにあるのだが、わずか百円の馬券を買えばその馬は同時に観客自身、ファン自身のものなのである。そうして、自分自身が馬を通じ、レースをし、勝利や破局を織りなすのである。」又、別のところで「野球は最高の演劇であるというかつての自説をしりぞけて、いまや競馬は最高の演劇である。という説を高々とかかける」と書いているが、充分わかる言葉であると思う。

### (3)

馬券の払戻しをとり来ないファンが十年間の記録見ても必らずいるということは、やはり人間は完全に注意深いものでない、ぬけているところがあるものであることがよく分る。競馬法で、一年間はいつとりにきても払い戻すがそれ以後は無効になる。大体一回の

開催で十七、八万円に相当する馬券が無効になる。その大部分は自分の馬券が当らなかつたと思ひ違ひするのが多いのだと思う。

馬券の高額払戻しとしては、二五年以来十万円を越えたのが、五回程ある。率からいってこれまで一万レースやったとすれば、二千レースに一回ということになり、全く奇蹟の実現という外ない。概して、百円台の配当が多いところを見ると、番狂わせでない方が多いことにはなる。

### 競馬を構成するもの

競馬は皆が一生懸命いい競馬になるように努めなければならぬと誰もがいう。皆とは何であるか。

主催者(施行者)

馬(馬主)

既舎関係者(調教師、騎手、厩務員)

施 設(施設の所有者)

先ず右の四者が主役である。この四者の質が一番揃ったところが一番いい競馬をしていることになる。

主催者は、全競馬の責任者であって、競馬場を管理し、レース番組を作り、馬検査から

発売、審判等レースに関することに責任もつ外、馬券の発売、払戻し、場内の整理をしたり、宣伝広告、契約等必要な事務をする。賞金の決定、その支払いもする。

言いかえれば、極く当り前のことだが、主催者はフアンのことまで含めて全競馬が興趣溢れるように企画し、厳正に公正なレースを執行し、馬主さんは良駿を数多く出走させ、調教師、厩務員が馬をよく管理し調教し、騎手が正しい巧みな騎乗で、立派な美しい馬の全能力を発揮させ、施設の持主は、フアンのために美しい競馬場の景色と、快く見よい観覧席と売場を作り、馬が快適に走れる安全で美しい馬場を整備すれば、フアンは、良い馬の真剣なレースを気持のいい場所で、楽しく馬券買って、「最高の芸術品」といわれているサラブレッドの美しいレースを見て安心して楽しめることになる。

それが逆で、不正なレースでもあれば、フアンは怒るのが当り前で、競馬の信用は落ちフアンは安心して馬券を買うわけにいかなくなる。競馬を遊ぶ心は、とつてもとらなくとも、競馬を見たり馬券を買っていれば楽しくもので、とればなお楽しいというのが本当で

ある。

この四者の外に、予想新聞はレースや調教をよく見て、親切な適確な予想をすることが必要だし、馬の生産者は競馬場へ送る馬の生産に熱心にならなくてはならないし、フアンは乗るパスが混まないように頻繁に出るようになるとか、いろいろと関係者は多い。直接の関係ではないが農林省からは監督官が出張していて、競馬法に反するようなことがないか厳しく見ている。

全国公営競馬主催者協議会の調べによると三四年一〇月における全国公営競馬関係者数は、三万八千人を越えている。馬主、騎手、厩務員、主催者の従事員、業者の従事員等すべてである。大井競馬に専属する大体主人達は、都区職員四〇人、その臨時従事員一、五〇〇人、騎手六〇人、調教師四〇人、厩務員三〇〇人、馬主さん三〇〇人というところである。

### レースと馬のこと

区営競馬を始めた頃は、一回の競馬を前半三日やると、中一日休み、後半三日やるといふ具合で、一頭の馬でも前後半各々一日つま

り二度使っていたことがある。それで一回の競馬を三〇〇頭満たない数で、やっていたことがある。一回の競馬賞金も五五〇万円位だった。

それが第三年目には年間二四回大井競馬を開催するようになり、その頃から六日連続して行なうことになり、大井、川崎、船橋、浦和の各競馬場で交互に毎日競馬やるようになったが、そうなると馬不足は一番頭の痛いこととなった。そこで、大井としては主催者が馬を買ってきて馬を増やし馬主に一定の条件で譲渡することとし、条例・規則を設け、購買を実施した。その仕事は今日までつづき昭和二六年以降三三年度迄に合計四〇〇頭を越えた。その中約三分の二は当組合の購買馬である。その中二七、二八両年度には濠洲まで買いにいった。これらの馬はよく働らいた。現在ではそれらの馬の子、孫その又下が優秀な成績で働らいている。購買してきた馬で有名なのは、オパールオーキット、ミッドブーム(この二頭は天皇賞馬となった)、その年の日本の短距離の代表馬であったゲリー、或いはコンチエンス、ファストロ等一流馬が出た。最近では、オンスロートという馬はい

くつかレコードを破っている。

馬主さん達もどどん馬を買ってくるようになり、馬数も競馬の発展の歩みに比例して年々増加し、最近では一回の競馬に六〇〇頭の馬が出るのは珍しくなくなって当り前になっている。十年前と比べれば倍の壮観さである。大体一レース平均九頭乃至十頭となつて略々馬数の目標は理想に近くなつた。賞金総額は十年前と比べれば約三倍の一、七〇〇万円位になつている。最高のレース「秋の鞍」には賞金一着馬三〇〇万円となつているがそこまで、大井競馬の格は上つた。

馬資源については数において目標に達したことは前に述べたが、今後はサラ系レースの増加を図り、アラ系レースの数を減らすようにし、そういう血種別の向上と同時に馬の質をもつとよくすることが大事な課題となつている。

現在の一レース平均九一〇頭が楽にできるようになつたのも十年間の発展のおかげである。主催者として、三頭乃至四頭建てのレースを多勢のファンに見せるときの心苦しきつたらない。この頃はそんな思いをしなくてすむようになった。

こうなつたのも、前に述べた四者の大井競馬へ寄せている熱のおかげと又大井競馬の上つた実力のおかげと思つている。

### 競馬場の夕暮と朝

競馬は、明るい中、薄暗くなる少し前頃に終る。競馬は日没に行なわれることは禁じられてゐる。最後の一二レースが終ると、先づ馬券のはずれた人達がスタンドを去り、出口に長い列を作つてバスを待つ。その次は当つた人達が払戻しを終つて行列を作るが、その頃にはもう薄暗くなりかかる。前から場内を掃除してゐた多勢の掃除夫の働らく姿が急にほつきり目につく。彼等は日没迄にすっかり掃除しなくてはならない。掃除終つて詰所へ戻る頃にはその姿は黒い影になる。さっきまで、掃除夫きりいな広い競馬場の中で或いは高く又低く方々に沢山の捨てられた馬券の紙がとんで掃除夫をなやましていたがこの頃は、暗い中ですべてが静まりかえつてゐる。

早い足で競馬場は真暗くなる。万余の人の去つたあとにの広い競馬場の中で穴場の窓が急に赤々と燈火に輝くの気づく。アルバイトの人達がいろいろ整理の仕事をしているのがわかる。

か。やがて、燈火の数が少なくなると、残業していた女子が黒い影になって、早足で競馬場を横切り去つていく。そして、私達も一日終つて帰ることになる。最後に守衛さんが残つて警戒に当る。

しかし競馬場の夜は短く、もう明るくなつたかならないうちに人々がまだ寝静まつている頃、厩舎から馬はひき出され、競馬場への道は馬の銀座通りとなる。朝の四時、五時、もう厩舎の人々はかわるがわる馬を引いて馬場に現われ、運動をして、厩舎に戻る。そして、競馬場は完全に目が覚める。

ファンが入る頃には、馬場はハロー・トラックの帯で掃いたような筋目目が美しく、又穴場のガラスは若い女子のアルバイトの手で拭き清められ、スタンドの椅子ははたきがかけられ、通路には水が打たれ、そうしてファンを待つ。やがて、下見所に、第一レースに出る若馬が、真面目な可愛い顔して、お尻の上に一握りの塩をのせたり、たてがみに色とりどりのリボンを編んだりして、赤黄青緑白黒などいろいろの色の服を着た騎手とともに現われる。こうして、又競馬は始まる。

(特別区競馬組合業務部長)